
交換日記

山田野太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交換日記

【Nコード】

N7342C

【作者名】

山田野太郎

【あらすじ】

病院に併設された図書館。その奥の本棚に、不思議な一冊の日記があつた……。過去と現在を繋ぐ日記が生み出す奇跡の物語。『世にも奇妙な物語』の一遍『過去からの日記』が原作の、感動話。

夏休みだった。

まだまだ暑かったあの日、ニューヨークでは日中の最高気温が三十七度を超えたとか、異常気象だとか言っていたような気がする。

でも、僕は宿題が終わっていなかったし、うまく言えないけれど、何か分からない不安が僕を支配している様だったから、世の中のどんな事だつて気にならなかった。

……そう。だから、僕は痴呆にでもなった様に図書館へ向かったんだ。

理由なんて物は無い。とにかく、自分が不安な答えを見つけたかった……いや、単に気を紛らわしたかっただけかもしれない。もちろん、答えは元っから無いのにね。

僕は徐に本棚と向き合った。

一冊一冊、僕は本を指でなぞってみた。ざらざらとした面、つるつるとした面、いろんな面を、僕は感じ取っていた。

そうやって、一時間、二時間ほど同じ本棚を往復していたのかも知らない。

僕はある事に気が付いた。一冊だけ題名が無いのだ。

その本を手に取り、表紙をめくった。『日記』とだけ、素朴な字で書いてあった。

次のページからは、ずっと日記が綴ってあった。

「……五月二十二日、晴れ。 人間は何で生きるのだろうか、つ

くづく思う。なぜ神様は、私を早く苦しみから解放してくれないのでしょうか……」

「……六月一日、曇り。いつも心の中に不安がある。もう生きているのが嫌になった……」

なぜかその時は、奇妙だとは感じなかったのだ。むしろ、わくわくした感情の方が強かったのかもしれない。

僕はペンを取って、同じように日記を綴り始めた。

「八月三日、晴れ。僕もあなたと同じで、心の中は不安でいっぱいです……」

……翌日、僕は再び図書館へ向かった。

図書館は病院に併設されているため、患者さんらしき人も、ちらほら見えた。

あの本棚の中あの日記は、昨日とさほど変わらない様子で置いてあった。

僕は日記を開いた。

「……八月四日、曇り。あなたは誰ですか？私の日記に勝手に落書きしないでください」

思わず声を上げそうになった。

この日記は継続されていた、生きていたのだ。誰か、僕が見ていない間に、この日記を読み、書いていたのだ。

「八月四日、晴れ。僕はこの町に住む高校生です。名前は片山聡といいます。成績は校内で上位だけど、最近ちょっと勉強をさばっています。あなたの事、もっと知りたいです」

「……八月五日、雨。私は愛知県に住む女子中学生です。今は治療で、この静岡の病院に入院しています。名前は大月加奈子といします。趣味は…読書かな。入院していると、運動もできないから……」

「八月六日、晴れ。返事ありがとう。前に書いたけど、僕の心は不安と苛立ちでいっぱいです。時々、生きることをやめたくくなります。最近、ずっとそうなんです……」

「……八月七日、晴れ。今まで黙っていましたが、私の病気は白血病です。まだ無菌室に移されていないし、治療すれば良くなると先生は言います。でも、母が私の余命は一年も無いと、話しているのを聞いてしまったんです。お願いですから、片山さんは、私の分まで生きてください。お願いです……」

「八月八日、晴れ。そうなんですか……。でも、加奈子ちゃんみたいな頑張りやさんなら、きっと白血病だって、治せると思います。大丈夫、がんばれ！」

「……八月九日、晴れ。ありがとうございます。でも、私は片山さんが思っているほど強い人間じゃありません。治療は痛いし、痛くて涙が出ることであってあります。この苦しみから逃げ出したい死にたいって気持ちの方が強いんです……」

僕は、ほーっとため息をついた。ミンミンゼミが、病院のケヤキにくつついて鳴いていた。

病院の広場のベンチに座って、日記の裏表紙を見た。

『平成十七年、五月』

えっ？今は平成十九年だ。この日記は二年前のもの？まさか……。

「八月十日、晴れ。いきなりで驚くかもしれませんが、加奈子ちゃんの生きている世界は、平成何年ですか？この日記、平成十七年の物ですよ？ちなみに、今は平成十九年です……」

「……八月十一日、晴れ。えっ？平成十七年じゃないんですか？片山さんと二年も差があるんですか……未来の人と会えるなんて奇跡ってあるんですね！」

「八月十二日、雨。そう、奇跡は必ずあります。だから、加奈子ちゃんも奇跡を信じて、必ず白血病を治してください。……そうだ、明日、君にとっては二年後の明日の午後三時、僕は病院の広場のベンチで待っています。絶対に来てください。約束です」

翌日、僕は、きっかり午後三時に、広場のベンチに座っていた。空はどこまでも透き通っていて、美しかった。

そう、思わずこう感じてしまうほど、美しかったんだ。時計を見た。

もう四時半だ。一時間半も経っている。

……嫌な予感がした。

僕は病院の受付を訪れた。

「すみません、大月加奈子って人、入院してますか……」
受付の人が顔を上げた。

「ああ、その人なら……」

一瞬、記憶が飛んだような感じがした。

……大月加奈子は現代にいない。既に一年前に死んでいたのだ。空を見上げた。変わらずに青い。

僕は、図書館の日記をそつと開いた。

ペンを握った。いや、やめようとペンを下げた。でも、もう一度握り直した。

「八月十三日、曇り。 今日、加奈子ちゃんに会いました。二年後の君は……」

ペンが止まった。頬を涙が伝った。嗚咽を押し殺そうとして、ペンを持つ手が震えた。日記に涙が落ちて、インクが滲んだ。いろんな気持ちが詰まった涙だった。

「……二年後の君は、とても元気でした。僕と同じ歳になっていました。だから、君の病気も治ります。僕を信じて、奇跡を信じて、がんばってください……」

僕が涙を拭った時、日記に文字が浮かび上がってきた。

「……私……信じてる……」

今年は僕が高校を卒業する年である。

受験も終わって、一段落付いた、という具合だ。

……そして、あれから二年経つ。

彼女と出会った時のように、図書館へ行った。

あの本棚には、もうあの日記はない。

本棚に溜まったほこりは、二年分のほこりだった。

外に出て、あの時のベンチに座った。

隣には、彼女がいるような気がした。

ケヤキには、蝉はいなかった。

でも……でも……。

でも僕は“奇跡”を信じていたんだ。

彼女に会える。

加奈子に必ず会えると……。

心のどこかに、そんな気持ちがあった。

……ふと人の気配を感じた。

太陽に包まれた春の日の午後。

白いワンピースに、白い帽子。そして、あの日記を持った少女が、そこにはいた。

「奇跡……信じてたよ……」

(後書き)

この小説は『過去からの日記』を元に書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7342c/>

交換日記

2010年12月31日02時47分発行